

## 『全体性と無限』における「分離」について

森田 博之（一橋大学大学院社会学研究科修士課程）

本発表では、エマニュエル・レヴィナス『全体性と無限』における「分離」の概念について扱う。

『全体性と無限』においてレヴィナスは、主体の取りうる様態として「全体性を志向するもの」と「無限を志向するもの」の二つを想定している。前者は、主体の側の知的枠組みや自他を結ぶ中立的な体系、つまり全体性のうちに他者を還元し、他者から他者そのものとしての性格を奪い取る暴力的なものとして描かれる。このような全体性への志向を前提した哲学としてレヴィナスが批判するのは、パルメニデスからスピノザ、ヘーゲルに至る体系の哲学や、ハイデガーの存在論などである。これに対し後者は、他者の他者そのものとしての性格へと開かれた、倫理的な主体のあり方として描かれる。「無限なもの」とは、「観念を超えた観念」というように形容され、「規定できない」という形で消極的に規定される。しかし無限なものが超越しているという事態は、主体が「無限なもの」の観念を持つことによってはじめて可能になる。レヴィナスによれば、この「無限なもの」とは、他者そのものとしての性格が尊重された形での、「他者」であるということになる。

このように、全体性を志向する主体と無限を志向する主体の特徴は画然と区別されるのであるが、しかしその区別にもかかわらず、前者から後者へと移行する過程についての記述は、必ずしも容易かつ明快であるというわけではない。全体性から無限なものへと、主体がその志向を転換させる契機として、一体何が求められるのか。本発表ではとりわけ「分離」(séparation)の概念に着目し、まず主体が全体性に抵抗し、無限なものとしての他者に出会う諸段階を追っていくことで、この問いについて明らかにしていく。またその中で、レヴィナスの考える主体の諸性質と、主体と「他者」との関係について、一定の解答を得ることを試みたい。

以上のことを踏まえたうえで、さらに『全体性と無限』以前の著作、とりわけ『実存から実存者へ』における主体定立の議論を参照し、元基態という非人称性と、主体の定立との関係に関して、レヴィナスの思索がどのように変遷したのか、またその意義について明らかにする。その上でハイデガーの存在論における現存在的主体と対比させ、『全体性と無限』においてかなりあいまいに記述されている部分の多い存在者と存在との関係を、レヴィナスが一体どのように考えているのか、またそこでは他者との関係がどのように捉え直されているのかについて明らかにする。最後に、非人称性、全体性、他者との関係の中で、主体の定立において分離の果たす役割とその根拠について考察する。